

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 56, 2020. 3

\*\*\*\*\*

半澤 洵先生小伝(4)－妻美加そして家族・親族への思い－	半澤 久	1
ミュージアムコンサート 朗読とフルートによる HARMONIA	平池 則雄・吉美	6
博物館という“メディア”－音の記録、SPレコード鑑賞会－	藤井 真知子	7
続・風邪にご用心	久末 進一	8

## 特別寄稿

### 半澤 洵先生小伝（４）－妻美加そして家族・親族への思い－

北海道科学大学 名誉教授 半澤 久

#### 1. 妻美加と家族

これまで述べてきた祖父洵が敬愛する恩師新渡戸稲造博士の言葉「世のため人のため」を心に刻み実践できたのは、洵の家族や親類縁者の支えがあったからと思う。今回は、洵とその家族・親族のことをファミリーヒストリーとして記す。

祖父洵は、1906(明治 39)年に 27 歳で 2 歳年下の平沼美加と結婚した(写真 1)。美加は、今風に言うと理系女子であった。1899(明治 32)年に女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)に理科生として入学した。写真 2 は、在学中の理科実験の様子である。当時、既に理系教師養成のための教育が、女子に対してしっかり行われていたことが窺える。美加は、教員免許を取得し同校を 1903(明治 36)年に卒業し、群馬県女子高等師範学校(現群馬大学)の数学教師となった。同師範学校で 2 年勤務した後、1905(明治 38)年に北海道庁立高等女学校(現札幌北高校)に採用された。そして洵と結婚後も 1914(大正 3)年まで同高等女学校で教師を続けた。

洵と美加には、女子 3 人、男子 3 人の計 6 人の子供がいる(写真 3)。誕生順に、長女徳、二女孝、長男道郎、二男啓二、三女慶、三男宏(筆者の父)である。美加は、仕事と子育てを両立させ、三女慶が生まれる前年 1914(大正 3)年まで教師として勤めた。

長女徳は、日本女子大学校(現日本女子大学)を卒業し、鉱山工学が専門で北大工学部教授となる宮城県出身の松野栄治と結婚した。

二女孝は、姉と同じく日本女子大学校を卒業し、厚生省医官の鈴木 繁と結婚した。繁は、東大医学部で博士号を取得後、厚生省研究所に在職中の 1942(昭和 17)年に応召し軍医として満州へ赴いた。終戦時、夫繁はシベリアに抑



写真 1 洵と美加の婚礼時、1906(明治 39)年 (筆者所蔵)



写真 2 女子高等師範学校時代の実験の様子 左側が美加、1900(明治 33)年頃 (筆者所蔵)

\* タイトル「半澤 洵先生小伝」は編集委員会による。



写真3 洵・美加と子供たち、1919(大正8)年後列右端 洵、前列左から長女徳、美加と三男宏、二女孝、洵の父時中、長男道郎と慶、洵の母加代、二男啓二 (筆者所蔵)

留され、孝と3人の子供たちは満州で難民収容所に収容された。その一年後1946(昭和21)年、孝は病身であったが子供たちと日本へ引き揚げる事ができ、一時札幌の実家に身を寄せて療養した。夫繁は、その翌年1947(昭和22)年にシベリアから東京へ帰還でき、孝と子供たちは東京へ戻り家族が揃った。そのような体験をした娘のことを気遣ってか、洵は東京の孝の家をよく訪れていたと、私は孝の長男<sup>はじめ</sup>から聞いた。

三女慶は有機化学が専門で北大理学部教授となる入江<sup>とおし</sup>遠と結婚した。遠は、松下村塾で松陰門下四天王と呼ばれたひとり入江九一(他は高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿)の孫にあたる<sup>1)</sup>。

長男道郎は北大理学部化学科を卒業した後、北大農学部林産製造学講座教授となった。道郎は、馬を愛し馬術に親しみ、永年北大馬術部の部長として多くの優秀な学生騎手を育て、日本の学生馬術の振興発展に尽くした<sup>2)</sup>。道郎は、大島直子と結婚した。直子は、大島金太郎博士の三女である。大島博士は、洵にとって札幌農学校の先輩であり教師であり、また「札幌遠友夜学校」の2代目代表も務め、台北帝国大学農学部長として台湾の農業振興に大きな貢献をしたひとである。



写真4 洵・美加の子供たち、1970年代後半 左から二女孝、長女徳、三女慶、三男宏、長男道郎、二男啓二 (半澤道郎所蔵)

二男啓二は北大農学部農芸化学科を卒業し、雪印乳業株式会社に入社し、後年同社の技術担当常務取締役となった。啓二は、デンマークやニュージーランドなど当時の酪農先進国を視察し、日本の酪農業や乳製品製造技術向上に貢献している。

三男宏は北大工学部機械工学科を1941(昭和16)年に繰り上げ卒業し陸軍での兵役を経て、戦後北大工学部機械工学科教員となり教授となった。その後、苫小牧工業高等専門校長、長岡技術科学大学副学長を歴任した。宏は、永井早苗と結婚した。早苗の父は、北大医学部小児科の初代教授永井一夫である。

このように、洵の三人の娘はそれぞれ理系・医系学問領域で仕事をする夫を持ち、三人の息子は理系分野の大学教授や技術者となった(写真4)。

洵の孫の代までで応用菌学の分野の研究を継承した者はいないが、農芸化学を学び食品や農業関連分野で仕事をしているのは、雪印乳業株式会社に勤めた洵の二男啓二と、農薬とバイオテック企業のホクサン株式会社<sup>たかし</sup>に在職している孫卓(洵の三男宏の二男、筆者の弟)の二人である。

洵には、姉が一人、妹が三人いる。姉の雍は、札幌農学校で洵の先輩である相澤元次郎と結婚した。相澤は、「相澤商會」を立ち上げ「純粋培養納豆菌」の販売を担当した。雍には四男三女7人の子供がいて、長女<sup>まき</sup>満壽は東京音楽学校(現東京芸大)で学び声楽家となり、「時計台の鐘」の作詞作曲者でバイオリニストの高階哲夫が最初の夫であった(写真5)。現在時計台では、村井満壽が歌う「時計台の鐘」が流れている。



写真5 時計台の鐘(1922(大正11)年)の作詞・作曲者高階哲夫とピアノは妻満壽(洵の姪) (札幌市時計台1階展示写真を筆者撮影)



洵のすぐ下の妹澄<sup>すみ</sup>は、医師早川千代松と結婚し北海道秩父別に住んだ。早川は早川珍竹林の号をもつ文人でもあり、洵が編纂した雑誌『納豆』に「納豆名家句集」などを寄稿している。その下の妹律<sup>りつ</sup>は、札幌農学校で洵の後輩で後に北海道大学農学部教授となる秋野豊太と結婚した。末妹深雪<sup>みゆき</sup>は、洵の妻美加の実家平沼姓を継ぎ平沼深雪となった。深雪は私立女子美術学校(現女子美術大学)で日本画を学び、卒業後北海道庁立札幌高等女学校の図画教師となった<sup>3)</sup>。深雪の作品が現在道立近代美術館に一点収蔵されている。また、深雪は「北海道美術協会」(現道展)の創立会員の一人でもあった。

## 2. 通称「博士村」と村会

洵の家は、札幌市桑園地区で北大植物園からも比較的近いところである(写真 6)。図 1 は洵の家の周辺の住宅配置図である。図中の居住者名は、1940 年頃の人々である。図のように、洵の家の向いは洵と札幌農学校同期の星野勇三博士宅、その東隣は高岡熊雄博士宅、同西隣は時任一彦博士宅、洵の家の西隣は高倉新一郎博士宅である。また、ごく近くには洵の学問上の恩師宮部金吾博士宅があった<sup>4)</sup>。このように、北大教授達が隣り合って住むこの街区をいつしか人々は「博士村」と呼ぶようになった。私が子供の頃、祖父洵、祖母美加が住むこの「博士村」の家で、大叔母の深雪、伯父道郎の家族 5 人、私の父宏と母と弟妹合わせて 6 人の合計 14 人が一つ屋根の下で暮らしていた。私は、特に大叔母の深雪に行儀などを厳しく躾けられた記憶がある。

この「博士村」では「村会」と名付けた懇親会が 1912(大正元)年から始まり 1965(昭和 40)年まではほぼ月に 1 度各家持ち回りで開催していた。通常は男性だけの会であるが、何か節目の会では夫人同伴で開かれた(写真 7)。村会は一種の文化サロンのようなものであった。村会は、毎回当番がその日の話題などを 1 ページに記した「村會日誌」が残っている(写真 8)。なお、この「村會日誌」については池上重康氏の詳細な報文がある<sup>4)</sup>。

祖父洵がこの村会の当番のときは、祖母美加の陣頭指揮で伯母の直子と私の母早苗がとても忙し



写真 6 半澤 洵宅(年代不明)  
通称「博士村 (桑園)」(筆者所蔵)



図 1 桑園「博士村」配置図<sup>4)</sup>  
(上下左右の縮率は筆者が変更)



写真 7 博士村「村会」メンバーたち 1940 年代  
後列左から星野勇三、高岡熊雄、時任一彦、  
宮脇 富、新島善直、半澤 洵、高倉新一郎、  
前列左から 3 人目半澤美加 (筆者所蔵)

く晚餐の支度をして  
いた。私と弟妹と従  
姉たちは、晚餐のお  
相伴ができ楽しく興  
奮してその晩を過ご  
した。村会は、私た  
ちが応接間と呼んで  
いた洋室で行われて  
いた。私は、会の様  
子を直接見ることは  
なかったが、ドアの



写真 8 「村會日誌」の表紙  
(北大大学文書館所蔵)

向こうの応接間から洵が得意の<sup>うたい</sup>謡を披露しているのが聞こえてきたこともあり、なんとも楽しげな雰囲気であった。

### 3. 仙台学寮と人の縁

洵は、自身のルーツで洵の祖父と父母が生まれ育った宮城県を常に心に留めていた。宮城県との絆を大切にしたいから発案し具体的に実現した事業が「仙台学寮」の設立と運営であった。この寮は、宮城県出身の北大生のための寄宿寮である。この「仙台学寮」の設立からその後の経緯に関しては、杉野目 浩博士の報文「財団法人仙台学寮関係資料」の中の〈解題〉に詳細が記されている<sup>5)</sup>。以下にそのごく一部を引用する。

「学生会館建設は、1923(大正 12)年 5 月、貞山公(伊達正宗公)祭典に於いて、半澤 洵、平塚直治(洵と同じ札幌白石村出身で札幌農学校の先輩第 14 期生、帝国製麻株式会社取締役札幌支店長)、佐々木啓七(北海道庁地方統計主事)の三氏によって発議された。洵が建設委員長となり、建設資金の募金行脚を始めたが、同年 9 月 1 日の関東大震災に引き続く不況の中で苦労が多いものであった。一中略—それでも旧仙台藩、宮城県関係者有志の非常な努力により、関係者から募った寄附金で建設された。寮竣工は 1925(大正 14)年 11 月 29 日であった(写真 9)。建物は、木造 2 階建、延床面積 160.54 坪(約 530 m<sup>2</sup>)、竣工 1 年後に蒸気暖房設備導入、建設費は当時の金額でおよそ 3 万円である。」

1925(大正 14)年の寮竣工時の初代寮委員長(寮長)は、松川五郎氏(以降松川氏と記す)である。松川氏は宮城県出身で、父は日露戦争で満州軍作



写真 9 仙台学寮  
竣工時：1925(大正 14)年 11 月  
所在地：現在の札幌市中央区北 7 条西 12 丁目  
命名者：高橋是清(仙台藩ゆかりの元内閣総理大臣)  
設計：田中豊太郎  
施工：伊藤組(伊藤亀太郎)



写真 10 仙台学寮初代寮委員長 松川五郎氏とその子供らと 1941(昭和 16)年頃

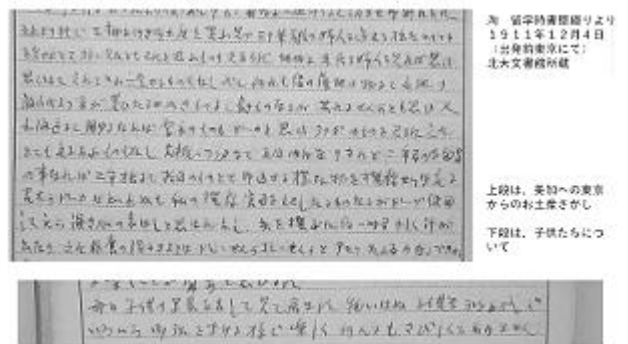


図 2 洵から妻美加への手紙、1911(明治 44)年(北大大学文書館所蔵)

戦参謀の松川敏胤陸軍大将である。彼は北大山岳部で登山やスキーで様々な実績を残している<sup>6)</sup>。

松川氏は、北大卒業後も洵の家を度々訪れている。写真 10 は、1941(昭和 16)年頃、松川氏が子供を連れて洵を訪れた時のひとコマである。この時は、洵の父<sup>これなか</sup>時中(写真後列右端)が健在であった。この写真の中で洵の右隣りは松川氏の長女<sup>さだこ</sup>貞子である。実は彼女は、後に私の母の実兄永井龍夫の妻<sup>たつお</sup>となった。これも仙台学寮と洵が取り持った縁かもしれない。

私が小学生のころ昭和 30 年代においても、洵と仙台学寮の寮生との交流はよく行われていたと記憶している。寮と洵の住まいが近かったので行き来が容易であったためとも思う。

### 4. おわりに

これまで記した洵の妻美加、そして子供たち、姉妹達そしてそれぞれのパートナー達が皆、洵が学問分野や近代納豆製造法普及で、あるいは社会事業で活動していた時に、共同で事業に参画した



り、援助をしたり、支援をしたりしていた。

結びに、祖父洵が妻美加や子供たちのことを愛し大切にしていたことを示すひとつの手紙と、私の記憶にある思い出を紹介する。

手紙は、洵が初めてヨーロッパへ留学に旅立つ直前に東京から妻美加へ送ったものである(図2)。そこには、洵が留守の2年間美加に使ってもらうため「エリマキ」を三越で買おうとして一生懸命に品物を吟味し、寒い北海道に最適のラクダのエリマキを買ったこと、そしてそれを、「実用を旨としたるものなるがドーゾ使用して我が温き心の表わしと思われたし」と綴られている。また、子供たちと離れているけれど、「毎日写真を出して見て居ました物いはぬ子供たちから・いろいろ御話をきける様で楽しく何にもさびしくありません」とも書いているのである。そしてもうひとつ私が印象深く記憶していることがある。それは、昭和30年代にテレビが各家庭に普及し始めた頃、わたし達の家にも「テレビが欲しい」と当時祖父母と同居していた孫たちは強く望んでいたが、祖父は賛成しなかった。その理由は、その頃妻美加が白内障で視力が衰えていてテレビを見ることができないと洵が察していたからである。

祖父はこのように妻美加を常にいたわり、1959(昭和34)年に美加が他界した後も終生その思いを持ち続けていた。祖父が、折に触れ私に語っていたのは、「おばあちゃん(妻美加のこと)のことをきちんと記録に残しておきたい」ということであつた。実際には果たせずであつたが、その準備はしていたようである。

私は、小学生の頃から祖父洵が自身の仕事の資料などを整理しているそばで過ごすことが多かった。その時祖父は、私に新渡戸稲造博士を「新渡戸先生」、宮部金吾博士を「宮部先生」と呼び、そして札幌農学校同期の有島武郎氏のことなどを優しい口調で懐かしそうに話してくれた。私は、祖父の話聞きながら、直接会ってはいない偉大な彼らのことを想像し、そして祖父が彼らのことを心から尊敬しまた大切に思っていることを、子供ながらにも感じとることができた。

祖父洵が、信念として書いたものに「不屈不撓」がある(図3)。まさに、実践するからには必ずや

り遂げるという覚悟で、学問に社会事業に打ち込んでいたのだと思う。そして、その源は13歳で札幌農学校に入学し初めて出会った新渡戸稲造博士の「世のため人のため」の考え方であつたと思う。

洵は、米寿を祝い(写真11)、1970(昭和45)年91歳の時に当時史上最高齢で日本学士院会員となり、1972(昭和47)年9月25日に満93歳で永眠した。

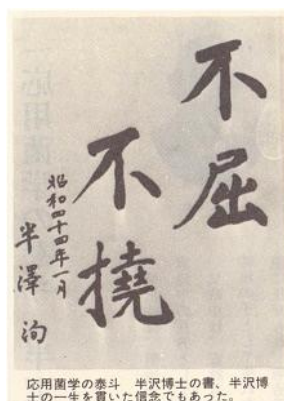


図3 洵の書「不屈不撓」



写真11 洵が米寿のとき  
1967(昭和42)年  
(筆者所蔵)

#### 引用文献・参考文献

- 1) 入江 遠編 (1994) 入江九一資料集. 320p.
- 2) 北大馬術部 web サイト (北大馬術部沿革)  
<https://hokudai-horse.xsrv.jp/enkaku/index.html>
- 3) 札幌市 (1997) 新札幌市史 第4巻 通史4, 第八編 転換期の札幌 第九章 大衆文化・モダニズム・文化統制 第三節 美術.
- 4) 池上重康 (2007) 桑園博士町「村会日誌」、北海道大学大学文書館年報, 第2号, 2007年3月, 95-122.
- 5) 杉野目 浩 (2008) 財団法人仙台学寮関係資料<解題>. 北海道大学大学文書館年報, 第3号, 2008年3月, 174-193.
- 6) 北大山岳部 web サイト (北大山岳部年表)  
<https://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc/modules/AACH/chronicle.htm>
- 7) 札幌市白石区老人クラブ連合会編 (1978) 白石歴史ものがたり.

活動報告

ミュージアムコンサート 朗読とフルートによる HARMONIA

チェンバロボランティア（ゲスト） 平池則雄・平池吉美

皆さん、こんにちは。チェンバロボランティアの新妻美紀さんのご厚意で、2020年2月2日に北海道大学総合博物館1階知の交流ホールで開催された「朗読とフルートによる HARMONIA」に参加させていただいた平池則雄、吉美の夫婦です。

新妻さんとは、10年以上のお付き合いで、すでに10回ほどは博物館コンサートに参加させていただいております。そもそも、新妻さんと吉美は、子供の学校の活動で知り合い、当時から私と新妻さんが同じチェンバロの先生にレッスンを受けていることがわかり、親しくさせていただいております。

さて、今回の演奏会は、「朗読」と音楽のコラボレーションを目指したものです。吉美の朗読歴は5年程度ですが、元NHKアナウンサーのよい先生に御指導をいただいております。少しずつうまくなっている様です。叙情歌の歌詞の朗読は、ある程度以上の年齢の方にとって（われわれも「ある程度以上の年齢ですが・・・」）、必ず心の中に残っている歌であり、どうしてもその方が持っている「歌」のイメージが抜けず、歌詞の音程に引っ張られて音のアクセントが変わっていくので、とてもむづかしいそうです。

今回の演奏曲のうち、カッシーニの「アヴェ・マリア」は、1970年頃にソ連の音楽家ウラディーミル・ヴァヴィロフ(Vladimir Vavilov)によって作曲されたと推測されています。1972年に彼は、その曲を「作曲者不詳」(Anonymous)の「アヴェ・マリア」として発表していました。しかし、彼の死後、マリア・ビエシュ(Maria Bieshu)(1996)やイネッサ・ガランテ(Inessa Galante)のデビュー盤(1994)では、D. Caccini 作曲と明記され、カッシーニの作曲として広まりました。実際の曲は、カッシーニが活躍したルネサンス末期やバロック時代初期とは異なる形式であり、音の動き方、伴奏の付け方などから考えると、現代の曲と思われます。とはいえ、演奏効果は高く、適切な緊張

感の高まりとメロディーの流れは、日本人好みだと思います。

面白いことに、作曲者が自分の曲を発表するときに「作曲者不詳」とする例は他にもあります。例えば、アルビノーニのアダージョとして知られる曲も、実際は、レモ・ジャゾット(Remo Giazotto)が1958年に出版した曲でアルビノーニ(バロック時代のイタリア人作曲家)の曲の断片が取り入れられているという仕込みですが、実際には、レモ・ジャゾット本人の作曲です。カラヤンの「アダージョ」にも採用されて有名になりました。

私見ですが、2015年4月1日から2016年7月26日までの耐震補強工事後は、「知の交流コーナー」の音響が改善しているように思われます。私たちが「知の交流コーナー」で演奏する曲は、ほとんどがバロック時代の曲です。当時フルートが演奏される場といえば、宮廷か教会だったでしょう。ヨーロッパの家ですから基本的に石造りです。となれば、演奏中にかなりの反響音があったはずで、実際にJ. S. Bachは分散和音を、反響音を利用することにより、和音として聞かせる様な曲を沢山作っています。

「知の交流コーナー」は大きさ、音響などの面からバロック音楽の演奏にとっても適しているところなので、今後とも機会があれば、是非演奏させていただきたい所です。



左から 平池則雄(フルート)、新妻美紀(チェンバロ)、平池吉美(朗読)

## 活動報告

## 博物館という“メディア” —音の記録、SPレコード鑑賞会—

メディアボランティア 藤井 真知子

“メディア”ボランティアって、定義が広くて色々なことができそう。

これが、北海道大学総合博物館のボランティア活動の中で、私がメディアボランティアを選んだひとつの理由です。

“メディア”と辞書(『goo 辞書』)を引いてみると、下記のように説明されています。

①媒体。手段。特に、新聞・雑誌・テレビなどの媒体。「マスメディア」「マルチメディア」

②《storage media》情報を記憶することのできる物体。ハードディスク、メモリーカード、光ディスクなど。記憶メディア。

やはり“メディア”の世界は広い！

メディアと博物館について考えを巡らせると、博物館は地球の歴史を記憶する媒体であり、無料で開放されていることは、記憶している情報を多くのみなさまへ頒布する手段であることから博物館自体が“メディア”であることがわかります。

メディアボランティアの活動は、メンバーそれぞれが記憶を保存している物品の整理やメンテナンスを行い情報の発信などに取り組むことです。来館者の皆様と楽しむイベント活動としては、メディアボランティアメンバー全員とチェンバロボランティアとして活躍されている石川さんと一緒に“SPレコード鑑賞会”を開催しています。SPレコードは石川さんのお祖父様やお父様が鑑賞のため購入され、長年大切に保管されてきたものをお借りしています。

この鑑賞会では、音楽がもたらしてくれる心の喜びを楽しむと共に、音を記録する技術やその発展の歴史を知り、生産されたレコードやレコードに記録された内容から当時の世界情勢に触れることができます。私は、SPレコードの音がいつも聞いている音よりもなめらかで耳にやさしく感じることから、録音技術の変遷に触れることができました。また、SPレコードのレーベルに“報国”というシール文字を見つけ、戦前の日本に触れ、

録音されている曲を演奏する音楽家の人生を知ることやその時代の各国の立ち位置やその中で芸術のあり方に触れることもできました。

音の記録から、私たちに喜びや学びをもたらしてくれる、SPレコードというメディアの素晴らしさを感じました。

SPレコード鑑賞会で楽しむ曲目は交響曲や序曲・合唱曲・独奏曲など様々ですが、選曲は「作曲家が自ら指揮をとった録音」「日本の音楽家による演奏」「名指揮者」など、音を創り奏でた偉人たちをテーマにしています。テーマや選曲のアイデアを石川さんにいただき、スタッフ全員で事前に選曲された音楽を聞き、演奏家たちの情報をインプットして鑑賞会に臨んでいます。

鑑賞会当日はレコードの音を楽しみに早くから博物館へお越しいただくお客様もいらっしゃり、音楽を楽しんだあとはそれぞれの感想や音楽との思い出話に花が咲きます。メディアボランティアはレコード世代ではないメンバーが多いのですが、皆様のお話から初めて知ることや気がつくことがあり、SPレコードと音楽以外にも楽しませていただいています。



藤井真知子さん



SPレコード鑑賞会の様子

(2019年12月21日、N201博物館応接室にて)



活動報告

続・風邪にご用心

図書ボランティア 久末 進一

本誌 52 号 (2019 年 3 月 1 日発行) で、押し葉に使った古新聞の『國民新聞』(大正 8 年 1 月 30 日付) から西班牙風邪 (北海道では西泊利風邪) の「戦慄すべき死亡率」記事を発見、紹介した。

記事は、「死亡率 30 乃至 38% で、長く高熱が続き、肺が犯され心臓マヒ又は呼吸困難で死に至る」という内容で、大正 7 (1918) 年から 3 年余りで国内約 45 万人、世界では約 4 千万人の患者が感染死した悪性感冒として歴史に残る。

今回、中国武漢市で発生し、世界的に広がった新型コロナウイルス感染症はかかったら強制的に入院させることのできる「指定感染症」に決まりました。

現在治療薬やワクチンが開発研究されているが、未だ時間がかかりそうだ。病院の風邪薬は症状をやわらげ静め、仕上げは患者自身の自然治癒力ということになる。

せき、発熱に始まり、重症急性呼吸器症候群 (SARS) の悪夢が思い出されるが、今度の新型肺炎は倦怠感があるという。持病持ちの高齢者が重症化しやすい。

西班牙風邪の流行当時は、感染予防法として重ねガーゼ (縦 2 寸、横 3 寸) 口掩いの装着が初めて全国で徹底され、素顔のまま外出すれば「マスクなしの命知らず」と非難された。塩水うがいと手洗いが習慣化し、人混みは避けるようになった。

未だ治療薬やワクチンなどの認識がなかった大正庶民の自衛策は、とにかくまず風邪をひかないために伝承されてきた体質改善の食材療法や民間

療法だった。

西班牙風邪のはやった大正を生き抜いた祖母からの直伝で、幼児の頃に貰われた実際効く処方箋がある。それは毎日緑茶を飲み、飲み残したお茶にひとつまみの塩を足しうがいする。お茶のカテキンの成分の一種の殺菌力を知っていたのかもしれない。くしゃみが出たら塩水で鼻うがいをする。鼻から注ぎ、口から吐き出して鼻の中を洗う。痛いのが効く。喉が痛くなったら、あぶり焼きネギ湿布を喉にまく。生姜のおろし汁に蜂蜜を加え、熱湯を入れて飲む。生姜の辛味成分はショウガオールと呼ばれ、体温を上げる働きがある。緑茶に焼き梅干しのクエン酸も殺菌力がある。ナンテンやキンカンの実は咳止めの効果がある。ゲンノショウコは下痢止めに効く。ニンニクやニラに入っているアリシンはビタミン B<sub>1</sub> とセットで疲労をとってくれる。特効薬代りは焼きニンニクで、泣きながら食べた記憶がある。

基礎体力を育み、早めに予防して感染しにくい状態を保ち、免疫不全も多臓器不全も生命力で乗り切っていくしかなかった先人の知恵を思い出してみると、民間療法の中にも医学や薬学の理にかなったものもあった。ヒトの免疫細胞がウイルスに勝てるよう先人たちはいろんな知恵をしぼって生きてきたのです。

切り札の新型コロナウイルスのワクチン開発を祈りつつ。

皆さん、どうぞお大事に。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 56

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会 (編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2020 年 3 月 1 日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>